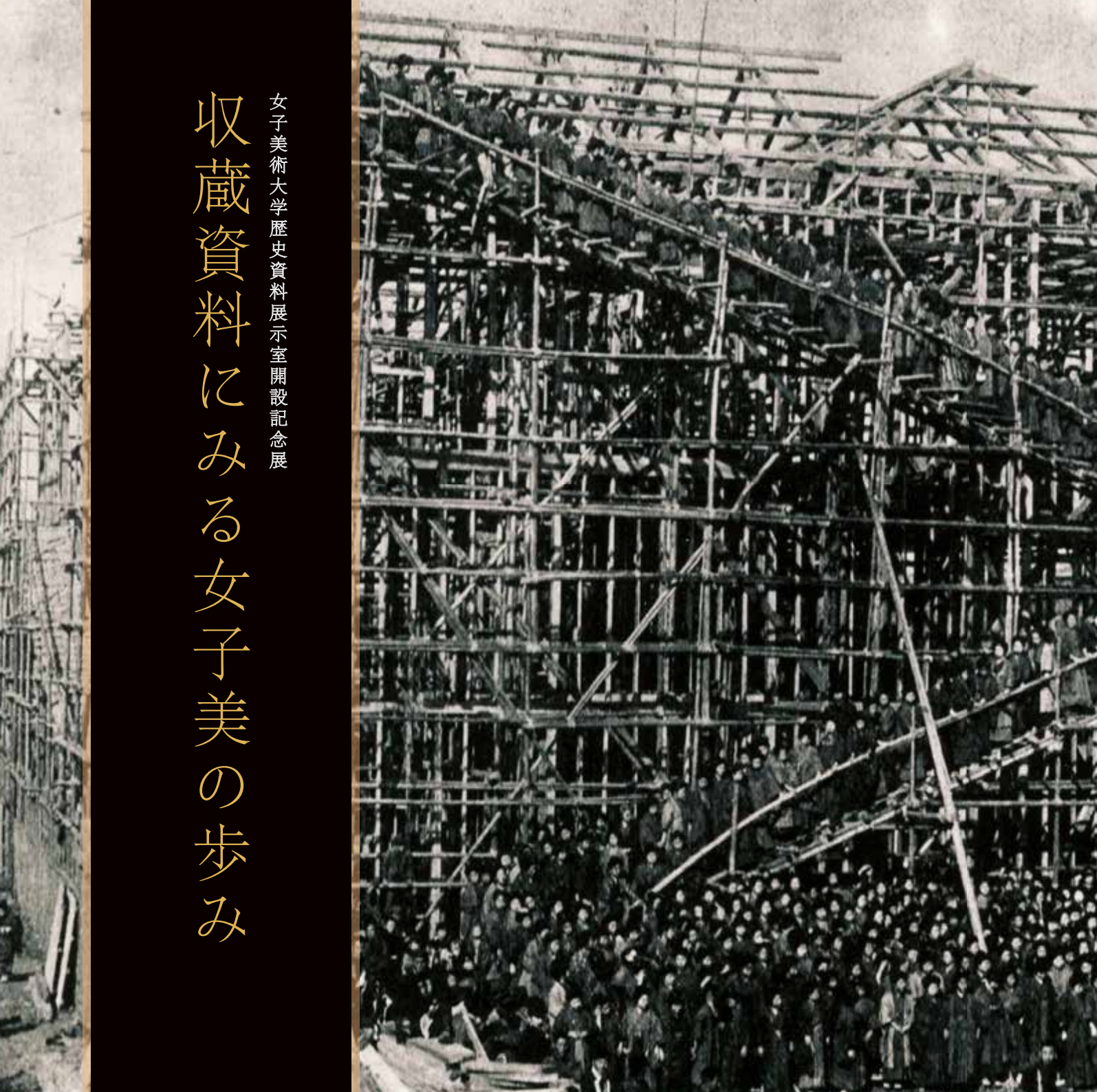
女子美術大学歴史資料展示室開設記念展

収蔵資料にみる女子美の歩み



歴史資料展示室開設にあたり

明治三三年（一九〇〇）一〇月、横井玉子・藤田文蔵ら四名は東京府に私立学校設立願を提出します。これが認可されたことを以て私立女子美術学校が創立します。その際、添えられた設立の趣旨には、女子に美術教育を施し、工芸・手工（芸）を学ばせ、彼女たちの自活の道を講じ、社会的地位を高めると書かれています。また、女子師範学校その他各種の女学校における美術教師を養成すると記されています。本学は、現在、これらを〈芸術による女性の自立〉〈女性の社会的地位の向上〉〈専門の技術家・美術教師の養成〉の三つに要約し、建学の精神として掲げています。この精神は、創立後の功労者であり、校主・二代目校長の佐藤志津に受け継がれ、その後も継承されました。

この度、創立一一〇周年記念事業の一つとして杉並キャンパス新一号館一階に歴史資料展示室を開設いたしました。本展示室開設にあたり卒業生の方々、在校生の父母の方々、また創立者・関係者のご子孫の方々に資料をご寄贈いただくなどのご支援・ご協力を賜りました。ご支援・ご協力をいただいたすべての方に厚く御礼申し上げます。

本展示室の目的の一つは建学の精神を今に伝え、創立者・功労者を顕彰すると共に、百十余年の歴史をもつ本学が果たしてきた社会的使命を顕現し、これらを学ぶことによって未来に歩む糧とすべく展示・紹介を行っていきます。

学生・生徒への自校史教育の場としての活用のみならず、ご来場される方々に展示を通じて本学の歩みを知っていただければ幸いです。

学校法人 女子美術大学
理事長　大村　智

一九〇〇

私立女子美術学校創立

藤田文蔵《ベートーベン胸像》石膏像

藤田 文蔵（1861-1934）
創立者の一人。初代校長

横井 玉子（1854-1903）
創立者の一人。学校設立申請の代表者

明治三三年（一九〇〇）一〇月、横井玉子・藤田文蔵・谷口鐵太郎・田中晋の四名によって東京府に私立学校設立願が提出され、許可を得た。これを以て私立女子美術学校は創立された。翌年の開校後まもなく谷口・田中は同校を去り、学校の運営は玉子・文蔵の二人に委ねられた。

横井玉子（一八五四―一九〇三）は熊本支藩の肥後新田藩家老原尹胤の娘として江戸鉄砲洲（現東京都中央区明石町）に生まれ、横井小楠の甥・左平太と結婚するが、まもなく死別。その後、高等裁縫・高等礼式の教員資格試験に合格し、女子学院等で教員を務める。一方、日本キリスト教矯風会の活動に参加、婦人の地位向上と社会改良のための活動を行った。自らも浅井忠らの洋画家に美術を学んだ経験をもつ。

藤田文蔵（一八六一―一九三四）は、池田家の漢学者・田中幾之進の三男として因旛国邑美郡湯所村（現鳥取県鳥取市）に生まれ、工部美術学校においてイタリアから招聘されたヴィンチェンツォ・ラグーザに洋風彫刻（塑造）を学ぶ。東京美術学校設立後、彫刻科授業嘱託となり、後に同校教授に就任した。

私立女子美術学校開校後、玉子は舎監兼監事を務め、日常の生徒指導と学校の経営を行った。また、初代校長となった藤田文蔵は、東京美術学校の教授として受け取る報酬のすべてを私立女子美術学校につぎ込むなど献身的な努力を続けた。

創立当初は、普通科（三年）・高等科（二年）・撰科（一年）・研究科（二年）が設置された。普通正科には、日本画科・西洋画科・彫塑科・蒔絵科・編物科・造花科・刺繍科の七つの学科があった。

収蔵資料ではないため、図版の掲載を割愛させていただきます。

私立女子美術学校校章
校章のデザインは藤田文蔵によって定められた
三種の神器である八咫鏡のなかに「美」の文字を配したデザイン

私立女子美術学校校名板　明治34年（1901）頃
開校当初、校舎に掲げられた校名板

収蔵資料ではないため、図版の掲載を割愛させていただきます。

東京府に提出した私立学校設立願（複製）
明治33年（1900）10月19日
申請者として横井玉子・藤田文蔵・田中晋・谷口鐵太郎の署名がなされている
原本は東京都公文書館所蔵

一九〇二
佐藤志津、校主就任

私立女子美術学校創立当初は入学生が少なく、開校後まもなく経営難に陥ることとなった。横井玉子、藤田文蔵は、順天堂医院長夫人であった佐藤志津に協力を求めた。佐藤志津は、同校の建学精神を理解し、学校経営に乗り出すことを決意する。明治三四年（一九〇一）志津は玉子、文蔵と誓約書を交わし、翌年一月、正式に私立女子美術学校校主となる。明治三七年（一九〇四）には二代目校長を兼任する。

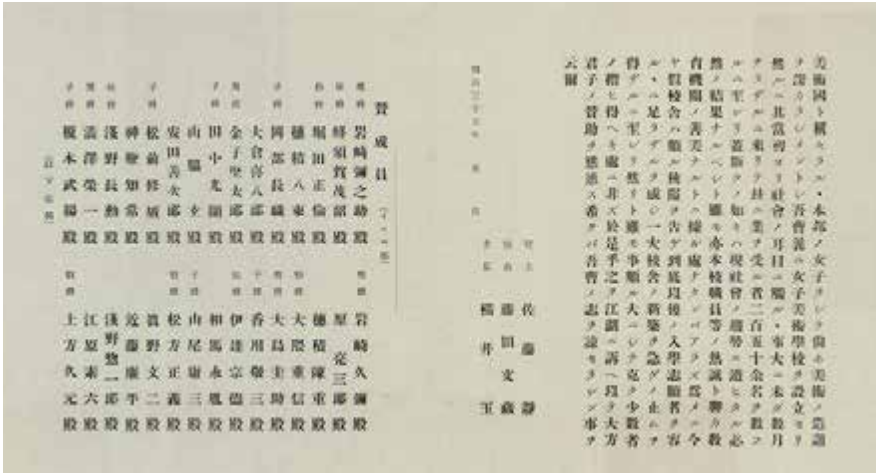
学校の運営に奔走した横井玉子は、体調の不調が続き、明治三五年（一九〇二）病状が急変し、翌年一月逝去。私立女子美術学校のために精魂を傾けた晩年であった。

志津は多岐に渡る人脈を生かし、積極的に寄付を求めていった。明治四一年（一九〇八）弓町校舎が火災のため焼失した後、本郷菊坂に木造三階建校舎を建設し、多数の学生を受け入れる環境を整えた。大正六年（一九一七）には、佐藤進（第二代順天堂堂主）が理事長に就任する。

佐藤　進（1845-1921）
大正6年（1917）初代理事長就任
大正8年（1919）第三代校長就任

佐藤 志津（1851-1919）
明治35年（1902）初代校主就任
明治37年（1904）第二代校長就任

私立女子美術学校 菊坂校舎　明治42年（1909）7月



私立女子美術学校新校舎建設のための寄付を求める書簡　明治35年（1902）
差出人は、校主・佐藤志津（静）、校長・藤田文蔵、舎監・横井玉子（玉）

一九一四

東京大正博覧会・サンフランシスコ万国博覧会での活躍

開校から十余年。国内外の博覧会において生徒作品が受賞、大きな教育成果が現れる。

大正三年（一九一四）上野公園で開催された東京大正博覧会に生徒作品を出品、銀牌・賞状を受ける。

翌四年、アメリカ・サンフランシスコで開催された万国博覧会の際には、文部省より生徒作品出品の指示を受け補助金を下付された。出品の結果、金牌・賞状を受ける。

サンフランシスコ万国博覧会出品作品写真
大正4年（1915）

他機関借用物のため、
図版の掲載を割愛
させていただきます。

【参考図版】刺繍生徒作品《孔雀図》
サンフランシスコ万国博覧会出品作
大正4年（1915）頃

銀牌

東京府
私立女子美術学校

生徒成績品

正六位　土屋純一
正　大位　藤原清彦
従五位勲六等　丸山　環
審査官
陸　正　位　成田五一
正五位勲六等清原雪信　同　一
正五位勲四等武藤金太郎
審査総長従二位勲一等文学博士男爵木村雄次
審査部長従四位勲二等田所美治
審査ノ成績ニ依リ前記ノ褒賞ヲ授與ス
大正三年七月十日
東京大正博覧会審査長勲八等勲位功二級男爵仁礼景範

私立女子美術学校に授与された東京大正博覧会賞状および銀牌
大正3年（1914）7月

一九一五

私立佐藤高等女学校創立

大正四年（一九一五）女子美術学校付属高等女学校が創立される。翌五年（一九一六）に私立佐藤高等女学校、大正八年（一九一九）に佐藤高等女学校と改称された。創立当初は、私立女子美術学校校主・校長であった佐藤志津が同校の校長を兼務した。翌五年には、戸野みちゑが二代目校長に就任。佐藤志津は名誉校長となった。

同校は、開校当初から私立女子美術学校とともに菊坂校舎を使用。昭和一〇年（一九三五）女子美術専門学校（昭和四年専門学校に昇格）が杉並校舎に移転した後も佐藤高等女学校は菊坂校舎に留まる。しかし、昭和二〇年（一九四五）戦火により校舎が全焼したため、杉並校舎に移転した。

昭和二二―二三年（一九四七―四八）、学制改革により佐藤中学校、佐藤高等学校を設置。昭和二六年（一九五一）に、佐藤女子高等学校、佐藤女子中学校、同年さらに女子美術大学付属高等学校・中学校と改称された。

制服・バックルを身につけた佐藤高等女学校生徒たち
昭和初期

私立女子美術学校付属高等女学校制服バックル
大正4年（1915）頃

佐藤高等女学校 職員辞令原簿
大正4年（1915）～昭和20年代

私立女子美術学校・私立佐藤高等女学校 生徒募集
『読売新聞』大正5年（1916）

佐藤高等女学校生徒 卒業生を送る会の劇
昭和5年（1930）

一九二五

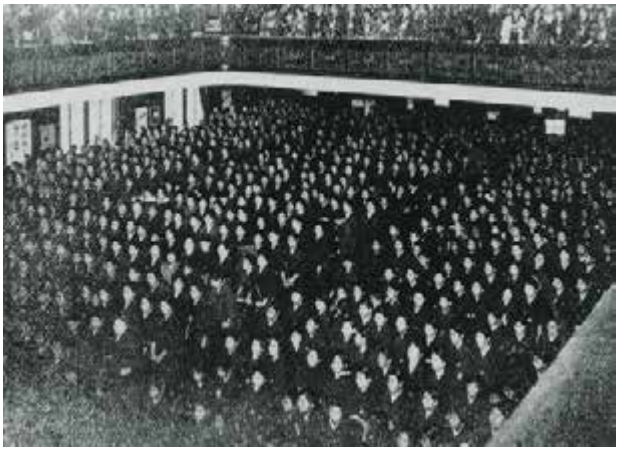
女子美術学校創立二五周年・佐藤高等女学校創立一〇周年

大正七年（一九一八）佐藤志津は、永年教育に従事し多くの功績をあげたことから帝国教育会より教育功労章を授与される。しかしその翌年、かねてより健康を害していた志津は流行性感冒に罹り逝去。

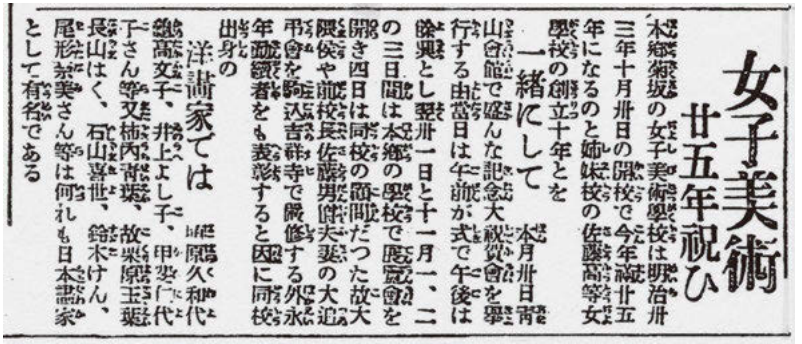
佐藤進は、財団法人化した大正六年（一九一七）より理事長を務めていたが、志津亡き後、第三代校長を兼任した。しかし、進は、大正一〇年（一九二一）在職二年余りで逝去。

同年、進の養嗣子・佐藤達次郎（第四代順天堂堂主）が第四代校長となる。大正一四年（一九二五）、女子美術学校は創立二五周年、佐藤高等女学校は創立一〇周年を迎え、記念大祝賀会を青山会館にて開催した。佐藤達次郎校長在職時には、佐藤高等女学校は定員増員するなどして、創立以来はじめて赤字を脱し順調な学校経営が実現された。

佐藤達次郎（1868-1959）
大正10年（1921）
第二代理事長・第四代校長就任



女子美術学校創立25 周年・佐藤高等女学校創立10周年記念祝賀会（青山会館）
理事長兼校長・佐藤達次郎が壇上に立つ



女子美術
廿五年祝ひ
一緒にして

女子美術学校創立25周年・佐藤高等女学校創立10周年についての記事
校内での展覧会や佐藤進・志津夫妻等の追悼会が行われたことを伝える
『読売新聞』大正14年（1925）

帯留め 大正14年（1925）
女子美術学校創立25周年
佐藤高等女学校創立10周年記念品

一九二九
女子美術専門学校へ昇格
一九三五
女子美術専門学校、杉並校舎へ移転

昭和二年（一九二七）文部大臣に専門学校の認可を申請、昭和四年（一九二九）認可を受け、女子美術専門学校となる。

大正末期、菊坂校舎は建築から二〇年が経ち、修繕箇所も増え、女子美術専門学校・佐藤高等女学校生徒合わせて約一五〇〇名が学ぶには余りに狭い校地・校舎となっていた。そのために、この頃から新校地獲得を検討しはじめ、昭和三年（一九二八）にようやく豊多摩郡和田堀町和田（現杉並区和田）に校地を確保した。これが現在の杉並キャンパスである。それにともない、女子美術専門学校は、昭和九年（一九三四）から翌一〇年にかけて菊坂から杉並へ校舎を移転。一方、佐藤高等女学校は菊坂校舎に残り、同校舎全面を使用することとなった。

女子美術専門学校 杉並校舎　昭和10年（1935）

『女子美術専門学校要覧』
授業や寄宿舎規則など学生生活について書かれている

女子美術専門学校寄宿生　昭和5年（1930）

『読売新聞』「女学校新風景」に掲載された女子美術専門学校学生を描いた挿絵
昭和4年（1929）

一九四九
女子美術大学発足
一九五〇
女子美術大学短期大学部発足

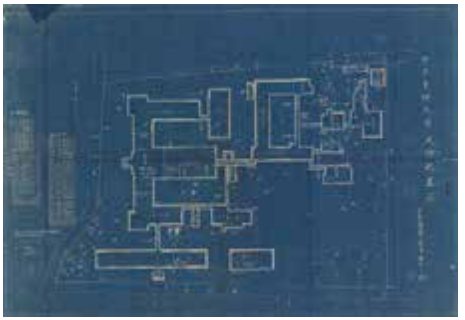
第二次大戦下において杉並校舎は空襲の被害を逃れたが、菊坂の佐藤高等女学校校舎は昭和二〇年（一九四五）三月の空襲により全焼、杉並校舎に移転を余儀なくされた。

昭和二三年（一九四八）七月、女子美術大学設立申請を行い、翌二四年（一九四九）二月に認可を受けた。ここに、新制大学女子美術大学が発足された。また、昭和二四年（一九四九）一〇月、短期大学部設置を申請、翌二五年（一九五〇）三月に認可され、女子美術大学短期大学部が併設された。

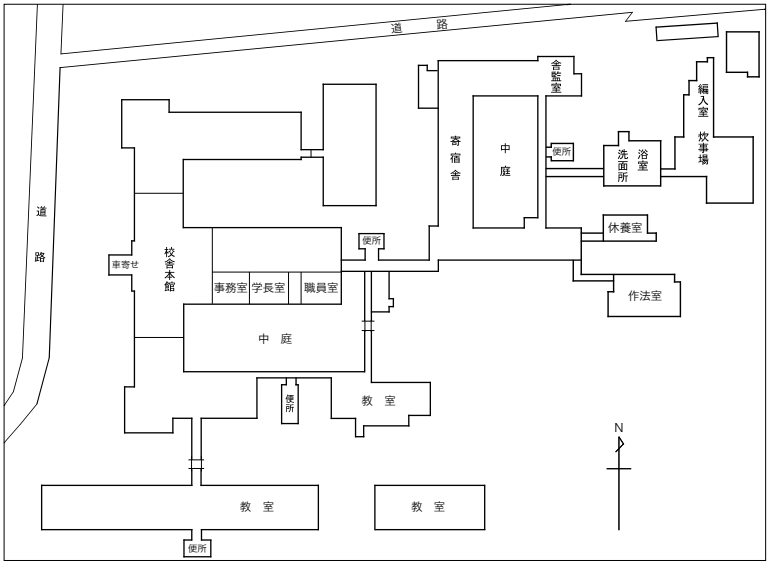
芸術学部美術学科洋画科授業
昭和31年（1956）1月

女子美術大学正門前　昭和25年（1950）

芸術学部美術学科工芸科染の実習　昭和31年（1956）1月



女子美術大学建物配置図
昭和25年（1950）



女子美術大学建物配置図のトレース図
昭和31年（1956）4月の火災によって西側の校舎（本館・別館）の大半が焼失する

一九六〇
創立六〇周年

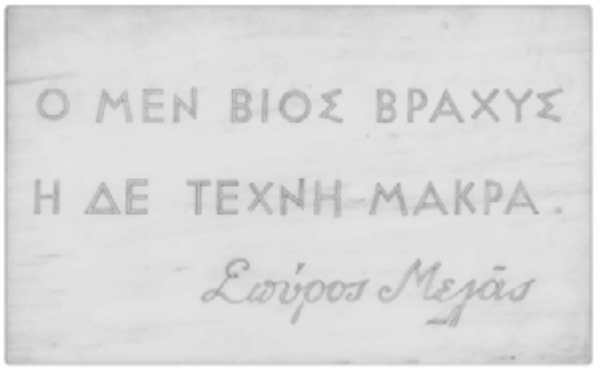
杉並校舎新1号館落成　昭和33年（1958）

杉並校舎本館火災直後　昭和31年（1956）

昭和三一年（一九五六）四月、火災により杉並校舎の大半が焼失した。父母や同窓会による総額一億円の募金等の協力もあり、次々に新校舎を建設した。

昭和三五年（一九六〇）創立六〇周年記念式典が挙行され、『女子美術大学略年史』が刊行された。そして、海外研修でギリシャに赴いていた乗松巌教授（当時）は、ギリシャの人々から文化交流として「人生は短く、芸術は永し」と刻んだ大理石の記念碑板を贈られた。本学ではこの碑板を原型とし、六〇周年碑板を製作、石碑に埋め込み、杉並校地内に設置している。

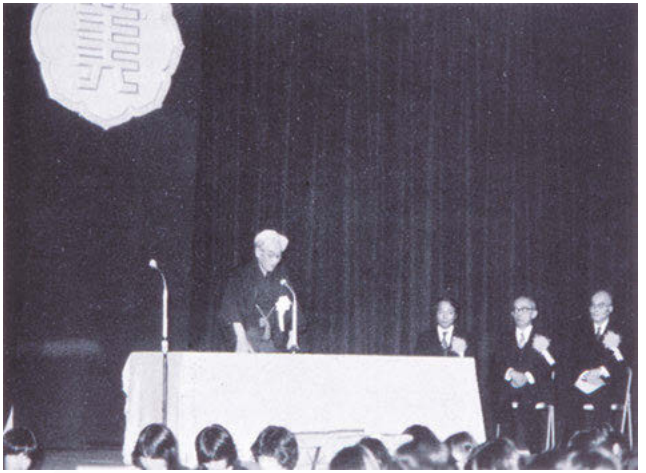
女子美術大学創立60周年記念式典　（杉並校舎）



女子美術大学創立60周年記念碑板 原型 大理石
昭和35年（1960）頃

女子美術大学創立60周年記念碑板
（杉並校地）

一九八〇 創立八〇周年 一九九〇 相模原キャンパス開校



創立80周年記念式典（杉並校舎） 柳悦孝学長挨拶 昭和55年（1980）

乗松巌《ファンファーレ》
石膏原型

ペンダントヘッド《ファンファーレ》
創立80周年記念品

昭和五五年（一九八〇）本学は創立八〇周年を迎え、記念式典を挙行。さらに『女子美術大学八〇周年史』を刊行した。

昭和四〇年（一九六五）茅ヶ崎に校地を取得、昭和四二年（一九六七）茅ヶ崎校舎で短期大学専攻科絵画の授業を開始、翌年付属幼稚園を開設したが、相模原キャンパス開設を目指し、平成二年（一九九〇）に茅ヶ崎校舎を閉じることになった。同年、相模原キャンパスは開校された。

平成六年（一九九四）に大学院美術研究科修士課程を、平成八年（一九九六）に大学院美術研究科博士後期課程を設置した。

相模原キャンパス　平成2年（1990）

二〇〇〇 創立一〇〇周年 二〇一〇 創立一一〇周年

平成一二年（二〇〇〇）、本学は創立一〇〇周年を迎え、記念式典をはじめ様々な記念事業を行う。平成一三年（二〇〇一）相模原キャンパスに創立一〇〇周年記念棟を完成させ、同棟内に女子美アートミュージアム（JAM）を開設した。

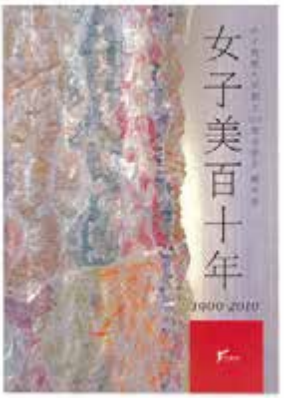
創立二〇周年を迎えた平成二二年（二〇一〇）には、芸術学部を美術学科、デザイン・工芸学科、アート・デザイン表現学科に、短期大学部造形学科を美術コース（平面・立体）、デザインコース（情報デザイン・創造デザイン）に改組した。

佐藤志津像

横井玉子像

創立110周年記念事業の一つとして平成23年（2011）11月、相模原キャンパスに横井玉子像・佐藤志津像が設置された。津田裕子教授が制作

柚木沙弥郎《創立100周年記念卓布》（左）　さまざまなデザインの包装紙（右）



女子美術大学歴史資料室編
『女子美術大学創立110年記念略年史
女子美百十年 1900-2010』
写真・年表で110年の歴史を紹介

女子美術大学歴史資料室編
『女子美術教育と日本の近代
―女子美110年の人物史』
（エディタースクール、2010）
教員・卒業生など本学に関係する
人物や各学科の教育を紹介

山崎光夫著『二つの星』（講談社、2010）
私立女子美術大学創設に尽力した横井
玉子・佐藤志津を主人公とする歴史小説

収蔵資料紹介

女子美術大学歴史資料室が収蔵する教材・学生作品等を紹介します

田中良厚　画手本《鶴鷹》巻子（部分）
明治33年（1900）

日本画の授業において画手本を模写する様子　大正4年（1915）頃
学生たちは画手本の模写することで描法を学んだ

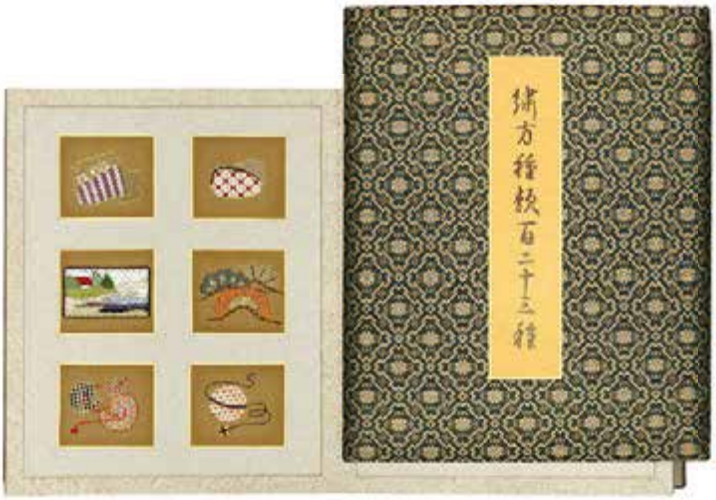
柴山鏡子（昭和18年師範科日本画部卒業）
植物写生課題作品

今野章子（昭和18年師範科日本画部卒業）
人体写生課題作品

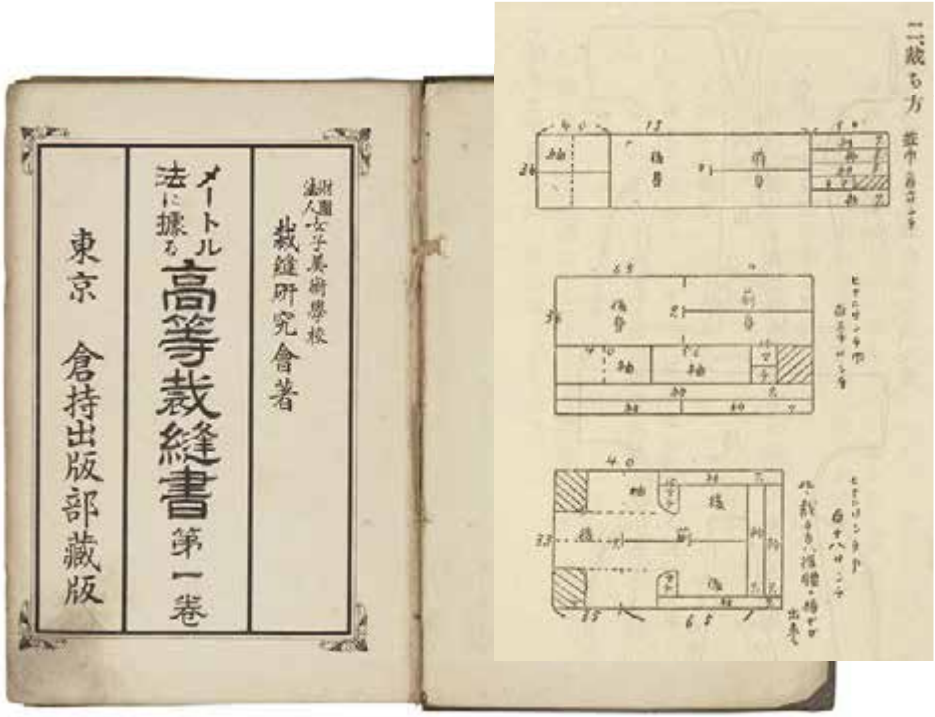
松岡冬(冬子)(1878-1971)
大正5年(1916)から昭和38年(1963)
まで刺繍科教員を務めた
『手軽に出来るチュール刺繍』や
『刺繍の基礎と応用』を著した

松岡冬(冬子)著『刺繍の基礎と応用 上巻』 倉持出版部　昭和7年(1932)
学生あるいは独学用に著された刺繍指導書。刺繍の心得、方法等が書かれている

刺繍科教室　大正7年(1918)
刺繍用の机で実習を行う刺繍科の学生たち



須藤勲子　(昭和14年師範科刺繍部卒業)
《繍方種類百二十三種》　昭和13年(1938)
実際の刺繍を施した見本帖。様々な種類の刺し方が収録されている



財団法人女子美術学校裁縫研究会著『メートル法に拠る高等裁縫書』全5巻のうち1巻　大正13年（1924）

この頃、従来使われていた尺貫法とともに明治期に導入されたメートル法が併用されるようになる。本書ではメートル法によって裁縫の心得、用具、技術等が解説されている。文中では「cm」を「サンチメートル」と表記。また、本書には尺貫法・メートル法の対照表が収録されている

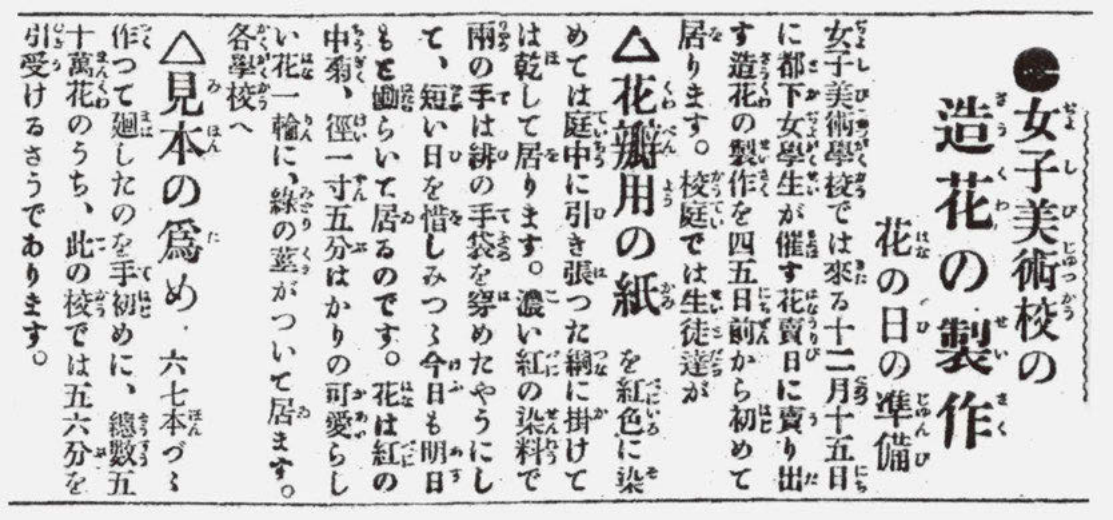
赤沼八重　（生没年不詳）

明治34年（1901）から昭和14年（1939）まで裁縫科教員を務めた
『嚢物教科書』や『メートル法に拠る高等裁縫書』など教科書の編纂を行った

裁縫雛形《セーター》(左)　裁縫雛形《袴》(右)

裁縫雛形は、裁縫を学ぶ際、課題として製作するミニチュアの衣服
学生たちは雛形製作を通じて縫い方を学んだ

裁縫科教室　大正3年（1914）頃



女子美術校の造花の製作

花の日の準備

女子美術學校では來る十二月十五日に都下女學生が催す花賣日に賣り出す造花の製作を四五日前から初めて居ります。校庭では生徒達が

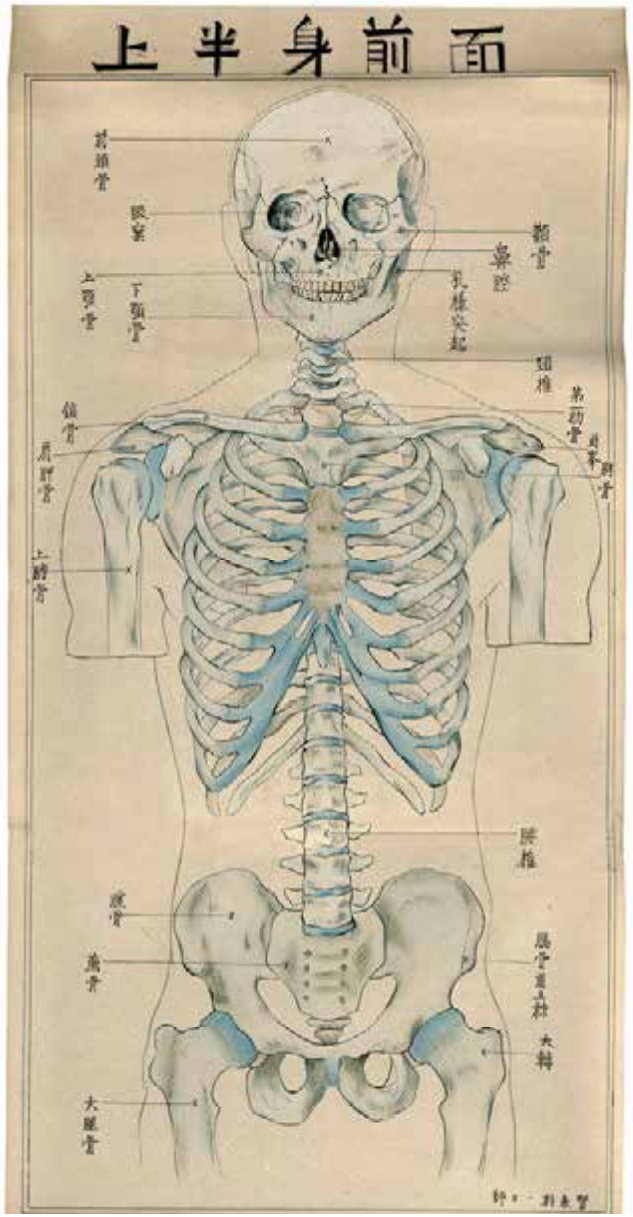
△花瓣用の紙を紅色に染めては庭中に引き張つた綱に掛けては乾して居ります。濃い紅の染料で兩の手は緋の手袋を穿めたやうにして、短い日を惜しみつゝ今日も明日もと働らいて居るのです。花は紅の中弱、徑一寸五分はかりの可愛らしい花一輪に、綠の莖がついて居ます。各學校へ

△見本の爲め、六七本づゝ作つて廻したのを手初めに、總數五十萬花のうち、此の校では五六分を引受けるさうであります。

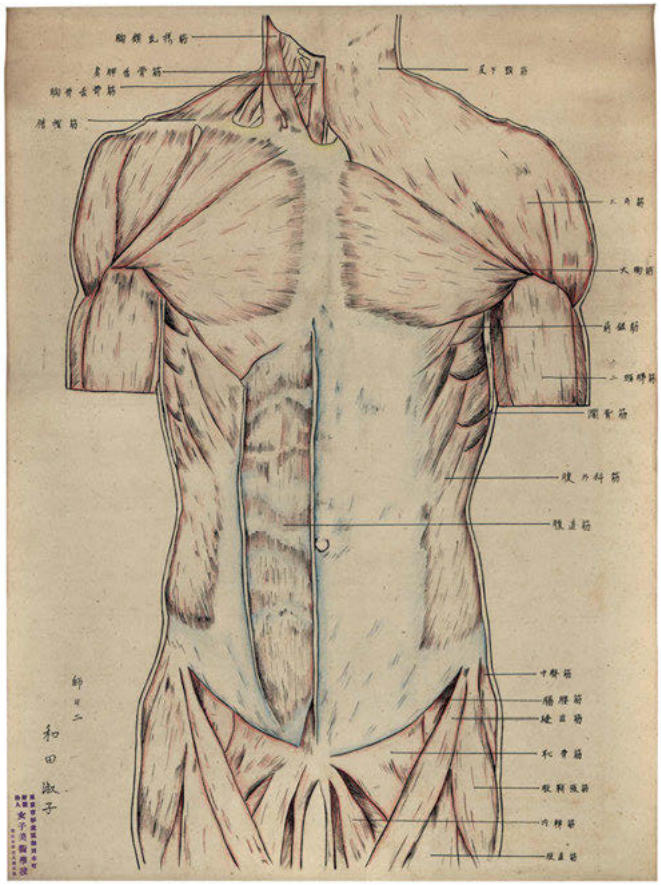
私立女子美術学校造花科の記事　『読売新聞』大正3年(1914)
都内女学生によって催される「花売日」に売る造花の製作をする学生の様子が書かれている

小池桃子　(昭和8年師範科造花部卒業)
造花作品 つまみ画《牡丹と木蓮》
昭和6年(1931)
つまみ画とは台紙などに布を貼り付けてつくる
手芸のことで、造花科にて教えられていた

造花科教室　大正8年(1919)
造花実習に取り組む学生たち。創立当初から行われていた造花教育は
昭和21年(1946)にその歴史を閉じる



朴峠賢（来賢）（昭和18年師範科日本画部卒業）
《藝術解剖掛図　（一）全身骨格》
昭和15年（1940）



和田淑子（昭和17年師範科日本画部卒業）
《藝術解剖掛図　（二）全身筋肉》
昭和15年（1940）

人体の解剖学的な構造を理解するために学ぶ美術解剖学（「芸用解剖」）は、当時、西洋画科・彫塑科において、日本画科では高等科、師範科に限って教えられた。上の2 点は、当時、師範科日本画部に学んでいた和田淑子、留学生・朴峠賢（来賢）の筆による解剖学掛図。すべての線描は、墨・面相筆によって描かれている

女子美術大学工芸科染織工芸展の様子　昭和36年（1961）
工芸科では教育の一環として学生作品の展示・即売会をデパートにて行った
学生が取り仕切るかたちで、昭和32年（1957）から約30年間実施された

女子美術大学工芸科染織工芸展ポスター
昭和41年（1966）
糸を染め、手織機で織った布に型染で文字を染めたポスター

芸術学部美術学科工芸科教員・助手一覧　昭和39年（1964）
当時の工芸科の教員・助手の署名がなされたボード
顔写真付。研究室に掲げられたものか

芸術学部美術学科工芸科織の実習
昭和31年（1956）

表紙写真

私立女子美術学校　菊坂校舎　上棟式　明治四二年（一九〇九）二月二六日

凡　例

本書は女子美術大学歴史資料室において二〇一二年五月一七日から一〇月二八日まで開催する「収蔵資料にみる女子美の歩み」展図録である。

ただし、本書掲載資料と展示資料が異なる場合がある。

女子美術大学歴史資料展示室開設記念展

収蔵作品にみる女子美の歩み展図録

初　版　二〇一二年五月一七日　発行

改訂版　二〇一二年六月一七日　発行

発　　行：女子美術大学歴史資料室

東京都杉並区和田一―四九―八

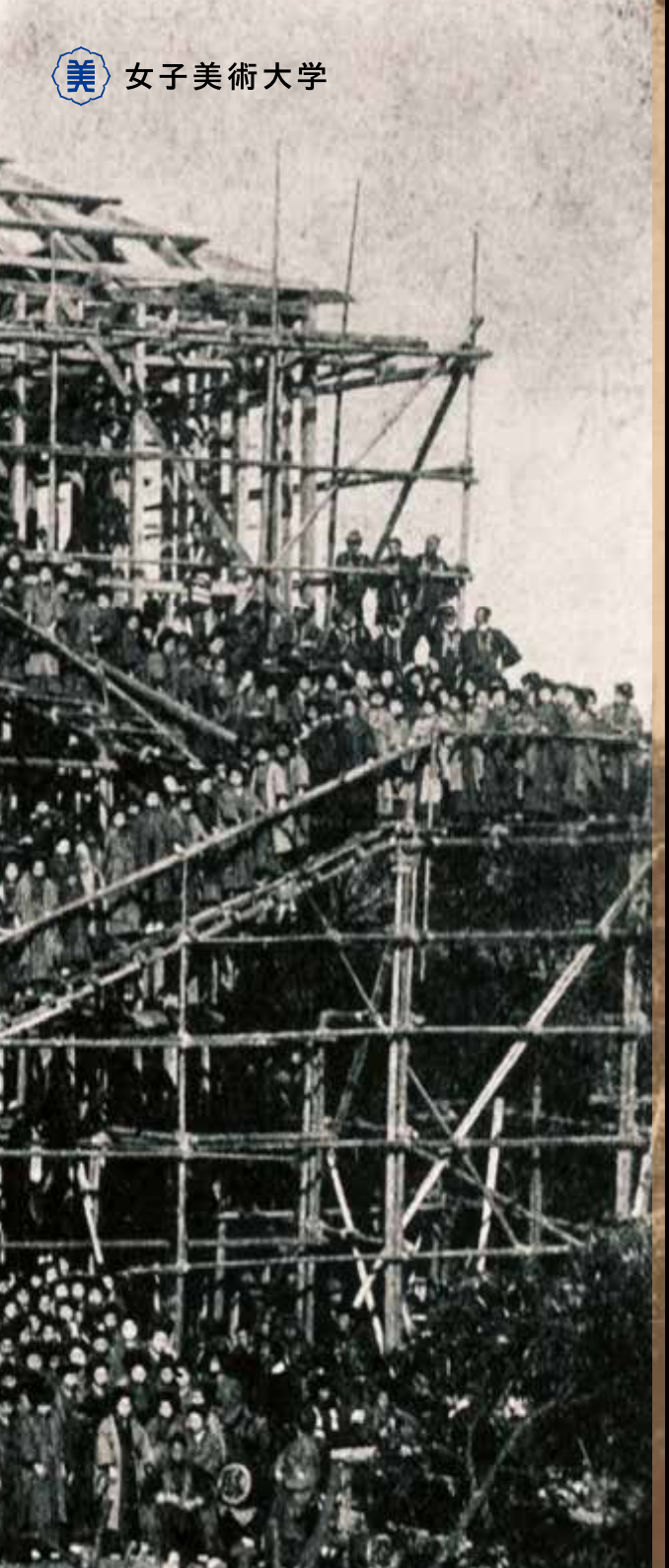
電話　〇三―五三四〇―四五〇〇（代表）

編　　集：山田直子（女子美術大学歴史資料室）

制作・印刷：株式會社　日相印刷

©2012 女子美術大学歴史資料室

女子美術大学



女子美術大学歴史資料展示室

東京都杉並区和田 1-49-8　女子美術大学杉並キャンパス 1 号館 1 階

開室時間　10：00 ～ 17：00（入室は 16：40 まで）
休 室 日　火・日・祝日（ただし特別開室あり）、展示替え期間
入 室 料　無 料
アクセス　東京メトロ丸ノ内線 東高円寺駅下車 徒歩約 8 分

問合せ先　女子美術大学歴史資料室　〒166-8538 東京都杉並区和田 1-49-8
TEL 03-5340-4500（代表）E-mail heritage@venus.joshibi.jp